

邸が歴史博物館になっているのを見学、近くの餐厅で鹿港鎮長の歓迎を受けて晚餐をとり、深夜に台中に至って市中のホテルに分宿した。

七月七日（金）は、林衡道の招待で、広東式の朝食ののち、台湾省文献委員会に至り、洪敏麟の説明を聞き、総督府文書を閲覧した。日本式の草体で書かれた文書を読める人が少くなることを見越して、漢訳と出版に全力を傾注しているとのことであった。さらに郊外の台湾省政府に至って、二階で英語による省政の現状のブリーフィングを聞くうちに、台北から台湾省主席林洋港（前台北市長）が到着、歓迎の辞を述べた。ついで台中にもどって、文献委員会の招待で台湾料理の中食をとった。

午後はバスで台南に向かい、新宮鎮の台南県文献委員会を訪問し、学甲鎮の慈濟宮（保生大帝廟）の構内にある県立歴史博物館において、財団法人学甲慈濟宮董事長鄭帝の招待で夕食をとり、同夜は台南市中山路一〇〇号の東亜楼大飯店に泊った。

七月八日（土）は、岡田は前夜、中山路の夜市で陳捷先、杜維運やアメリカ人たちと痛飲して、生ビールと黄酒の乾杯責めにあい、一日床上で呻吟していたので詳しくは知らないが、一行は午前には安平古堡、億載金城、延平郡王祠、午後は大南門、碑林、文廟、赤崁楼などを廻ったようである。同夜

はホテルの三階で最後の晚餐があった。

七月九日（日）、バスで帰途につき、北港の天后宮に参拝ののち、近くで中食、台北に帰着するころは、すさまじいスコールが降って、連日の日照りつづきを解消した。円山大飯店に着いてみれば、大結婚式の最中で、キャデラックの波がホテルを取り巻いていた。

このシンポジウムは、冒頭に記したような事情で開かれるに至ったもので、このままの形で何回も繰り返して定期的に開かれるような性質のものではない。しかしこのシンポジウムは、清朝研究がいまや世界の中国学の主流となりつつある趨勢を明かに示したものである。あらゆる根本史料が完備していて、空理空論ぬきに中国の本質に迫りうるのは、清朝時代をおいてほかにないからである。

第十五回野尻湖クリルタイ

岡田 英弘

一九七八年のクリルタイは、例年のごとく、七月十六日から十九日まで、野尻湖ホテルにおいて開かれた。参加者は次の六十七名である。

青木富太郎（高知大学）、青木稔栄（北海道大学）、荒川正晴（早稲田大学）、埴博（早稲田大学）、昌彼得（故宮博物院）、張藏（故宮博物院）、趙雅書（台湾大学）、海老沢哲雄（埼玉大学）、永島勇二（国士館大学）、柴野千恵子（九州大学）、Sadollah Chaussey（アフガニスタン大使館、上智大学）、後藤晃（山形大学）、Bookut Giveng（Hacettepe 大学）、羽生田新一（国士館大学）、橋本勝（大阪外国語大学）、林俊雄（東京大学）、堀川徹（京都大学）、Paul Hyer (Brigham Young 大学)、泉幽香（民族学博物館）、金崎誠（シルクロード社）、神田信夫（明治大学）、姜信沆（成均館大学）、菅野裕臣（東京外国語大学）、加藤和秀（東海大学）、川又正智（国士館大学）、川村光郎（ヒブリオ）、菊池俊彦（北海道大学）、北川誠（北海道大学）、小林高四郎、百済康義（竜谷大学）、国木田明子（竜谷大学）、丸山亨（北海道大学）、増井寛也（立命館大学）、松村潤（日本大学）、松浦茂（京都大学）、松崎光久（早稲田大学）、三橋富治男（清和女子大学）、宮城仁美（早稲田大学）、宮脇淳子（大阪大学）、森川哲雄（九州大学）、村上正二（大正大学）、村野文江（九州大学）、長沢和俊（早稲田大学）、永田雄三（東京外国語大学）、中江利孝（岡山大学）、中見立夫（一橋大学）、小田寿典（京都大学）、小谷仲男

（鳥取大学）、岡田英弘（東京外国語大学）、岡本孝（金沢大学）、岡崎敬（九州大学）、大葉昇一（早稲田大学）、太田敬子（東京大学）、定光大燈（竜谷大学）、佐口透（金沢大学）、佐藤明美（TBSブリタニカ）、佐藤道郎（広島大学）、沢田勲（金沢経済大学）、設楽国広（東京外国語大学）、島田正郎（明治大学）、鈴木隆一（早稲田大学）、多田守（立命館大学）、田中明良（東京大学）、徳永康元（関西外国語大学）、津田敏郎（北海道大学）、梅村坦（東洋文庫）、山田信夫（大阪大学）。

見られる通り、国外からは五ヵ国（中華民国、アフガニスタン、トルコ、アメリカ、大韓民国）からの参加者があり、しかもその四人までが台北の国際清史檔案研討会に出席した人々であったこと、全般に学生の参加がますます多く、かつ小林高四郎氏がはじめて出席されたことなどが今回の特徴であった。

七月十六日（日）、夕食前に現地に集合、レジストレーションのち、翌朝からプログラムが始まった。

十七日（月）の午前（9:30~12:30）は Confessions の第一部である。以下、要を採って記す。

青木（寛）はホトゴイトを研究、また『マルコ・ポーロ旅行記』に修訂を加えて『マルコ・ポーロ東方見聞録』として再刊した。青木（稔）は『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文

鑑』を資料として卒論「蒙古語の滿洲字文献について」を書く。荒川はトゥルファン漢文書を研究。泉は韓国の郷約、『新增東國輿地勝覽』の土産・姓氏を研究、Levi-Strauss の bricolage について書く。梅村は「十三世紀ウイギリスタンの公権力」を『東洋学報』に発表。永島は朝鮮の開国神話を卒論のテーマとする。柴野はモンゴル語を学習。海老沢は「キリキア・アルメニア王国とモンゴル帝国」を『埼玉大学教育学部紀要』に発表、『元典章』の索引の作成に従事。大葉は修論「探馬赤軍について」を書いた。岡田は『倭国』（中公新書）を刊行、A A 研では滿洲語、北京語資料のコンピュータ・プロセスに従事、特定研究「言語」の一環として漢字と中国語、日本語の関係を研究。小田はウイグル文『八陽経』の研究を続ける。小谷はイラクのハムリン・ダムの水没に伴う調査に従事、前五〇〇〇年の農耕初期から前三〇〇〇年のシュメール王朝初期にかけての小さいテルを発掘。加藤はチャガタイ・ハーン国史を研究、史観が対立する Tarikh-i Vassaf と Tarikh-i Ujlatu では後者が真相に近いと指摘した。金崎は日本モンゴル協会の専務理事を勤め、また月刊誌『シルクロード』を刊行、十三言語の講習会を主宰。川又もイラクの発掘調査に従事。神田は『図説・中国の歴史——清帝国の盛衰』を書く。また阿南惟敬の遺稿集の編集が進んでいる。菅野は『言語』に「朝鮮語からの借用語」

を発表。菊池は新発見のカラフトの旧石器時代の遺物について『北海道考古学』に書く。北川はイル・ハーンと地方王朝との関係、イル・ハーンとイランの読書人層、イル・ハーンと地方領主との直接の結びつきについて論文三篇を発表。百済は京都大学人文科学研究所から竜谷大学に移管されたトゥルファン仏典の整理に従事する。『西域考古図譜』の解説篇を作る計画がある。ウイグル文『観無量寿経』は漢文からの訳と指摘した。国木田は竜谷大学の東洋史研究室で行われている大谷文書の索引作成作業と、竜谷大学東洋史学会の発足について報告した。後藤は「メディアナ憲章」の真偽を批判し、最近のマホメット伝の書評を紹介した。小林は一九七二年のドイツ滞在、パリ訪問について語り、ペリオの旧蔵書の所在などに触れた。佐口は Acta Asiatica の中央アジア特集号にモンゴル帝国時代を執筆。

中食後、遊覧船で湖を一周し、弁天島を訪うた。

午後はまず Confessions の第二部 (3: 00~4: 20) があった。

徳永は前年八月二十三日~二十七日の Nyíregyháza のハンガリー学会、八月二十九日~九月二日の Wien の国際言語学会に出席した。また Ligeti の二冊本の論文集が出ることをよび Collection of Tibetan MSS and Xylographs of Alexander Csoma de Kőrös (Budapest, 1976) を紹介し

た。姜は台北の政治大学で韓国語を一年間教えた。ハンデル資料を使った中国近代音韻史を研究する。太田はイランの中世史を志す。沢田は、突厥碑文研究会が発展して北陸ユーラシア文化研究会が創立され、金沢と富山に会員十四名を持つことを報告した。設楽は『シルクロード』に書いて、青年トルコ党は実在せず、統一と進歩委員会は情勢の発展に引きずられたまでであったことを指摘した。島田は著作集を出版する、遼代史(二冊)・清代の法典編纂、考古学の三部に分ける計画である。鈴木は唐代西北辺境の歴史地理を研究。田中はトルグートに興味を持つ。多田はオスマン・トルコに関心がある。津田は『札幌商科大学論集』に「清語老乞大の研究」を連載し、延世大学影印のパリ本の落丁を永平寺の金沢庄三郎本で補った。また Stephen Durrant の *Nisan saman i. bible* 英訳本を批評した。オロコ語の基礎語彙を調査中。長沢は日歴協にもっと関心を持って、内陸アジア史学会に加入せよと呼びかけた。永田はバルカン、トルコ、北アフリカを一周してオスマン帝国時代の公文書を探索して成果を収めた。A A 研ではトルコ語研修を実施中。

海外事情報告(7: 25~6: 00)に移り、岡崎敬が「近年における新疆ウイグル自治区における考古学的調査研究」と題して、人民共和国成立以後における黄文弼、夏鼐らの活動、一九五九年に始まった *Astana* の大発掘、ウルムチの博物館

の現状などについて語った。

岡田英弘は台北の「国際清史檔案研討会」について報告したが、内容は別項に詳しい。

夕食後、昌彼得がスライドを用いて、故宮博物院所蔵の清内府刊滿文大蔵経を紹介した。また岡崎の新疆の風物の紹介、川又のハムリン・ダム・サイトの発掘現場の紹介があった。

十八日(火)の午前(9: 30~12: 00)は、*Confessions* の第三部であった。

中見は修論「モンゴル独立と国際環境」を書いた。橋本はA A 研の大阪モンゴル語研修を担当、第三回モンゴリスト会議、ハワイの日本語・韓国語シンポジウムに出席。『モンゴルの昔話』に寄稿。近くウーランバートル大学に日本語教授として赴任する。塙は両漢時代の異民族政策を研究。羽生田は卒論「宋と遼の関係史」を執筆中。林は東京池袋に新設される古代オリエント博物館の派遣調査団の一員としてイラン、イラク、トルコ東部を巡った。堀川は遊牧ウズベクの定住化の問題を研究。増井は金朝建国以前の女直の政治組織を研究。松浦は金代女直史。松村は『旧満洲檔』の「宙字檔」の用紙の漢文奏摺を分析して「天命朝の奏疏」を『日本大学史学科五十周年記念歴史学論文集』に発表。『遊牧社会史探究』の(一)として「滿文老檔・旧満洲檔対照表 太宗朝」を

刊行。『年羹堯奏摺』を読む。また矢立ての歴史を研究し、すべて南アジア・西アジアから伝来した形式かと考える。丸山は中期モンゴル語を研究。三橋は中東調査会のために「オスマン・トルコ史散歩」を、『シルクロード』に「オスマン文化史」を書く。宮城は「西夏と遼の關係」を修論に書く予定。宮脇は卒論「十七世紀のモンゴル」の概要を、台北のシンポジウムで発表した。岡本は元末明初の諸王の行動について研究。森川は『トド文学史料集』中の「四オイラト史」に多く含まれるジュンガルの集団名を分析、全九枚の *Altan nabdin teike* の紹介を書き、ツェツェン・ハーン部で書かれたものと推定、チングンザブの叛乱、アムルサナーのドモク、『巴音塔拉盟史資料集成』中の康熙朝文書を研究。山田は「タムガとニシャン」(『足利惇氏論文集』)、「突厥の興亡」(『古代文明の謎と興亡』)を書いた。川村はトモルトゴアの蒙英辞典(八〇〇枚、見出し語二万)の刊行を準備中。中江は歴史的な乳製品に興味を持ち、三年間モンゴル学術調査に従事して来た。

昌は湖北省孝感県の人。中央大学で歴史学を専攻して一九四五年に卒業、中央図書館に入った。翌年、館とともに南京に移った。一九四九年、命を奉じて善本を台湾に移した。一九六八年、故宮博物院の善本檔案部を兼務、一九七〇年、中央図書館を辞して故宮博物院の専任となった。現任、故宮博

物院図書文献処処長、東海大学教授、東呉大学教授。なお、この機会を借りて、昌は故宮博物院がスポンサーとなって、来年、台湾において第五回東亜アルタイ学会(East Asian Altaic Conference)が開かれることを宣言した。

Givens は国際交流基金の招待で、A A 研の外国人研究員として日本文化論を研究中。Gaussy はシルクロードに関する最近の名著として Shore の *Monteil* のものを紹介した。

張は台湾大学文学院史学系で清史を修め、故広縁立法委員に満洲語を学び、現任、故宮博物院図書文献処滿蒙藏文股股長。『宮中檔康熙朝奏摺』第八・九冊の滿文の漢訳と、『旧滿洲檔』太宗朝の部の漢訳を了え、いずれも刊行中。哈勘楚倫にモンゴル語、歐陽無畏にチベット語を学び、現在『藏文蔵経目錄』、『滿蒙蔵本目錄』を編纂中。

趙は同じく台大史学系の出身で、同系の教授。中国経済史、ことに宋代を専攻する。中国農業史の見地から、周辺地域の農業の研究に関心を持ち、狩猟民・遊牧民も農業を必要とすると考える。「水車の技術」を発表した。

Hyar は Berkeley のカリフォルニア大学の出身で、ブリガム・ヤング大学には二十二年勤務した。台北の中央研究院および政治大学辺政研究所に一年滞在したことがある。学位論文は“Japanese interest and activity in Tibet.” 二十世紀

の内モンゴル史を専攻、内モンゴル国民党、民族主義、自治運動、独立運動を研究、Mexico City の Orientalist Congress では徳王の伝記、Helsinki の PIAC では蒙匪、台北の清史檔案研討会では反乱の分析について発表。近く Jagchid Sechin と共著の Mongolian Society and Culture を Prague から刊行する。また匈奴以来の通史を執筆中。

引き続き研究発表(2: 10-12: 30)に入り、張威が故宮博物院所蔵の滿漢蒙藏四体本『清涼山新志』を紹介して、五台山と順治より乾隆に及ぶ清室との関係に説き及んだ。

午後は研究発表の続きとして、北川誠一の「西アジア史料に見えるチンギス・ハーンの王権神授説」と、中江利孝の「モンゴルの乳製品」があった。北川は王権を正当化する説

話のタイプが、記述する側の民族文化の差を反映することを指摘した。中江は白人に少ない乳糖不耐症 (Lactose intolerance) が日本人では六〇〜八〇%のほり、これが乳製品の普及に大きな障害となっていることから、乳製品を常食とするモンゴル人の調査の意義を説いた。

十九日(水)は、久しぶりの Excursion として、バスで戸隠中社を経て宝光社に至り、荒松雄氏の歓迎を受けて中食をとり、バードラインを走って長野に出た。

なおこのクリルタイで発表された第五回東亜アルタイ学会については、すでに計画が相当進行している模様である。期待することとしたい。